

芥川龍之介

中村眞一郎

要選書・・・60

芥川龍之介

中村真一郎



要 薈 房

著者略歴

大正七年靜岡生。東大佛
文學科卒。東大佛文學講師。
主要著書。「死の影の下
に」五部作「夜半樂」「文
學の創造」「現代世界文學
入門」「文學の魅力」等。

要選書 60

芥川龍之介

定價 百九拾円
地方定價 百九拾五円

昭和廿九年十月五日印刷
昭和廿九年十月十日發行
昭和廿九年十一月十五日再版

著者 中村真一郎
なかむら しんいちろう

發行者 前田善子
まえのた ぜんこ

印刷者 鈴木才次
すずき すゐじ

東京都文京區駒込曙町十一

發行所 要書房

電話大塚 (94) 一六三七
四三五九
六三三八
振替東京 一一三二

落丁・瓢丁の節はおとりかえいたします。

製版 讀書印刷株式會社
印刷 鈴屋印刷株式會社

目次

1	前書き	七
2	人生	一一
3	青春	一六
4	家	二〇
5	下町	二五
6	世紀末	二九
7	ロマン・ロラン	三三
8	ゲーテ	三八
9	「生活教」	四三
10	短篇小説	四六

23	孤獨	102
22	文体	101
21	意識的	98
20	古典主義	94
19	芸術としての小説	89
18	廣津和郎	85
17	大正	80
16	明治	76
15	夏目漱石	70
14	森鷗外	64
13	西洋	59
12	心境	55
11	告白	50

24	處世	一二
25	家庭小説	一六
26	怪異	二一
27	懷疑	二五
28	芸術の神	二九
29	童話	三三
30	厭世主義	三七
31	死	四一
32	自殺	四五
33	空虚	四九
34	人間的	五三
35	不毛	五八
36	堀辰雄	六二

	37	昭和	一六
	38	後世	一七
	39	後書き	一七
		附記	一八
		芥川龍之介年譜	一八
		主要人名索引	一八

芥川龍之介

I 前書 き

加藤道夫の自殺したのは去年の年末だつた。加藤はぼくにとつては、有望な劇作家であるよりも先ず友人だつた。彼の最後に書いた原稿は『文学界』の新年号のための、『午年の作家の日記』だつたが、その同じ表題の原稿を同じ雑誌のためにぼくも書いた。つまりぼくらは同年だつた。

同じ年代の仲間に死なれたことは、ぼくにとつては最初の経験だつた。ぼくは、すっかり参つてしまつた。何よりも彼の死は、ぼくには納得が行かなかつた。しかし歳月というものは、その謎は謎のままにしておいて、一方で宛かもその死が必然的なことであるかのような、心理的な錯覚によつてぼくの精神を包んで行つてくれるだろう。現に、彼の全集を編纂しながら、その一生が既に完結したものとして、ぼくの眼の前に見えて来つつあることに、ぼくは驚いている。

人間は幾歳で死んでも、その人生は結局、完結したものと、死後には見えて来るものであるらしい。死はその人間の人生から、全ての未来の可能性を奪うことで、その人間の像を全く異つた

ものに変えてしまふ。ぼくら、生きている人間は、いわば可能性の束^{たば}として生きている。死んだ人間の一生は、要するにひとつの芸術作品、たとえば一篇の小説のように見えて来るものだ。ぼくらは——少くともぼくは、自分の一生が人から一篇の小説のように、今、この瞬間から見られるだろう、というような想像には耐えられない。現在のぼくにとつて、人生は未だこれから幾らでも手を入れることのできる未成品なのである。そして自ら生を絶つ人は敢て、自分の人生の仕上げが済んだものとして、パレットを片附けることになる。加藤の死は、そうした想念をぼくのなかに改めて強く喚び覺した。

もうひとつ、——これは、ぼくが『午年の作家の日記』のなかにも書いておいたことなのだが、三十代の半ばというのは、中途半端な年齢である。青春期は既に終り、成熟には程遠い。いわば、人生をひとつの完結したものとしてくることの出来る時期は、既に四五年前に逸し、次の宿場を模索している、甚だ坐り心地の悪い過渡期である。自分の一生に見通しをつけるには、不適当な期間である。……と云うのがぼくのこの二三年の間の実感なのだが、加藤は敢てこの年齢で一生に区切りをつけることによつて、ぼくの実感に挑戦した。

芥川龍之介もその生涯を自らの手によつて完結させた人である。しかもぼくや加藤と同じ年配

でそれを行つた人である。元來、ぼくは中学生の時から（つまり岩波の普及版全集の出だした頃から）の芥川の愛読者であつた。日本の近代の作家のなかで、ぼくが最もその作品に親しんだのは、芥川であるかも知れない。勿論、彼と彼の作品とに対するぼくの感想は、時代と年齢との変化に応じて變りもし、複雑にもなつて來た。今、全集のどの頁を開けても、ぼくの生長の様々の時期に抱いた感想が前後もなく記憶のなから浮び上つて來る。その感想の断片を、いつか一度、徹底的に蒐集してみようと考へていたが、ぼくはどこから手をつけていいのか見当がつかかなかつた。

友人の死と、その年齢とは、もう一度、連想を芥川龍之介の方に導くことになつた。ぼくはこの機会に、この精神状態を利用して、ぼくの芥川像を組み立てて見ようと決心を固めた。ぼくはその試みに入つて行くのに、先ずぼく自身の現在の（これまで述べて來た）精神状態に照應する部分から始める。長年のぼくの計画は、ようやくぼぐすための糸口を見つけた訣だ。その糸口から入つて行つて、次々と遭遇することになる、様々の感想をアルバムのように列べて行くつもりである。それは必ずしも論理的な順序を追うことにはならないだろう。勿論、年代記的記述ともならないだろう。寧ろそれは、芥川龍之介の作品によつて文學を學んだ一人の男が、芥川の死の

年齢になる迄に、その文学について色々の時期に感じて来た感想の単なる集積に過ぎないものになるかも知れない。一方でそれは、自ら大正時代の文学に対する昭和の時代精神からの照明ともなるだろう。或いは対象とぼくとの間の、異つた環境と使命との対照を極だてることにもなるう。しかし、就中、それは**ぼく**の芥川像となるだろう。ぼくは自分を押え匿すことによつてでなく、積極的にぼく自身の内奥の秘密の数々を乾板として、芥川龍之介というひとりの作家像を前後左右から写し出してみようと思う。ぼくは、この文章のなかで、「**ぼく**」という代名詞を濫用することを遠慮しないつもりである。

2 人 生

「人生は一行のボオドレエルにも^も若^もかない。」と芥川龍之介は書いた。それは彼が死を直前に控えて、自分の一生を振り返り、その道程を年代記的に素描してみた文章（『或阿呆の一生』）のなかでだつた。な^なかというより冒頭の一章でだつた。晩年の彼がその重要な言葉を口にさせているのは、未だ人生をはじめたばかりの二十才の彼になのである。

即ち、この端的な感想は二十才の青年の心のうちにふと宿り、人生を終えようとした瞬間にもう一度、彼の記憶のなかに懐つた、と云うことになる。その後の十五年の生活がこの人生観を「やはり思つた通りだつた」と改めて承認させた、と云うことになる。

生

人

これは芸術至上主義的信念の告白であろうか。恐らく最初はそうであつたかも知れない。しかし、「ひとり芸術至上主義者に限らず、僕はあらゆる至上主義者——たとへばマッサアジ至上主義者にも好意と尊敬とを有するを常とす」（『プロレタリア文芸の可否』）と揶揄的に書いた人物が、

單純に芸術の光榮と不滅とを信じていたと想像することは莫迦げている。いや、それより彼の晩年の仕事そのものが、テオフィル・ゴージェ式の樂天的唯美主義から、いかに遠いところまで、作者が歩んで行つていたかを明らかに示している。

この「一行のボオドレエル」に比喩的に照應すると思われるのは、同じ『或阿呆の一生』のなかの、雨中の架空線の放つ火花の挿話である。同人雜誌時代の「彼は人生を見渡しても、何も特に欲しいものはなかつた。が、この紫色の火花だけは、——凄まじい空中の火花だけは命と取り換へてもつかまへたかつた。」と告白している。この挿話は『大尊寺信輔の半生』（この作品もまた、彼の晩年の主題をなした「精神的風景画」を描いたものであるが）のためのノートの一行と呼応する。「信輔、雨中の漏電の如き *mental flash* を欲す。」ここでもまた、彼は、「人生は一閃の架空線の火花にも若かない」と殆んど云いたがつているように見える。

「ボオドレエル」にせよ「火花」にせよ、それに対立してある「人生」は、彼の人生であるより、彼の前に、茫漠と挾つてゐる、灰色の砂漠のようなものである。單純な断言を恐れずに云えば、彼には彼自身の人生はなかつた。

ぼくの信念からすれば、人生はぼくの前にあるものというより、ぼく自身の作り上げるもので

ある。少くとも、ぼく自身を中心としてパースペクチヴを拡げているものである。換言すれば、ぼくの人生とは、ぼくの可能性の意識的な実現である。ある理想的目標への計画的な接近である。人生の歩みは、散歩よりも登山に近い。更に云いかえれば、人は一生を、彼自身の人格を象徴するひとつの伽藍の建設に捧げているのではないか。たとえその伽藍の規模や様式に無限のヴァリエーションがあるとしても。

芥川龍之介の全集は、その作品（小説）を制作年代順に配列している。そして第一巻から順を追つて読んで行くとき、それが一定の計画のもとに、年々書き加えられて行つたという印象を持つことはできない。そこには、いわば、「精神の原形式」のごときものの反映がみられない。そこに溢れるばかりに輝いているのは、絶えず、今までいたことは、別のことをしよう、と云う、芸術的好奇心の貪婪さだけである。彼の一生が激しい芸術的精進のそれであつたことは、疑いをいれない。しかしその精進は、殆んど、次つぎと異つた模様の花火を打ち上げようとする工人の努力に似ている。彼の決意は——人生の目的は「一行のポオドレエル」を作ることにあつたと思われる。美しい一行を得るためには、人生全部を敢て素材として切り刻んでしまおう、といった思い切つた態度さえ見られぬ訣ではない。

成程、マラルメも、世界は一冊の本のなかに描かれるものとして存在していると云う信仰を持つてはいた。しかし、マラルメの場合、彼の作品の年代的排列は、まさにひとつの計画が詩人の精神の中核に生れ、次第に枝を延し、葉を繁らせて行き、梢の天辺にまで実をみのらせたと云う趣きを示している。

芥川龍之介の自殺の原因を「人生に対する敗北」と定義した批評家がある。しかし「人生の計画の挫折」であるとは、何びとも定義し得ないだろう。彼はその処女作において既に完成した姿を見せていた。彼の自己形成は二十五才にして終点に到達しているかのようなのである。その後の十年間の作家生活は完成した自己のより一層の洗練と、その自己の中心へのより一層の真摯な接近への歩みに他ならない。従つて彼の作品の系列と、彼の生活（彼の作品や書簡集や友人たちの書き残したものから推察される限り）とは、奇妙な対照をなしている。彼の作品は生活的苦痛の増大に反比例して、輝きを増して行く。その文学と人生との関係は極めて浪漫的である、と云わねばならない。

「人生は狂人の主催に成つたオリムピック大会に似たものである。」とは、やはり彼の晩年の感慨である（『俳儒の言葉』）。ある構想に従つて生きるのではなく、人生は混沌たる把握し難い